彦根城表御殿

はじめに

城といえば天守閣をイメージするように、戦いとともに発達した天守閣は、武将にとって生命線であり、天守閣のまわりには、櫓や堀などさまざまな施設が造られました。しかし、徳川氏が天下を取り、やがて幕藩体制が確立してくると、天守閣は本来の機能を失い、かつての栄光を伝えるシンボルとしての役割を担うことが多くなりました。かわって城郭の一隅に、藩の政務をとり、あわせて藩主が日常生活を営む書院造りの住宅建築が普及し、しだいに重要性を増していきました。それが表御殿です。

彦根城表御殿は、天守閣がそびえる彦根山のふもと、表門を入ったところにありました。関ヵ原の合戦後ほどなく始まった彦根城築城の際、天守閣や各櫓などとともに造営されたと考えられます。その後、増改築を施しながらも江戸時代 250年余の風雪に耐え、明治11年頃ついに解体されました。その跡地は近年まで公衆グランドとして市民に開放されてきました。今回、当地に表御殿の復元を兼ねた博物館を建設することになり、事前に全域を発掘調査しました。

表御殿を描いた古絵図

発掘調査には、旧藩主井伊家に伝わる表御殿を描いた古絵図がたいへん参考になりました。古絵図を詳細にみると、表御殿は表向と奥向に分かれ、文化元年(1804)までに、一度大きな建て替えが実施されたようです。表向は表御殿の南側一帯を占め、藩の政務や公式行事を行なったところです。奥向は北側一帯を占め、藩主などが日常生活を営んだところです。

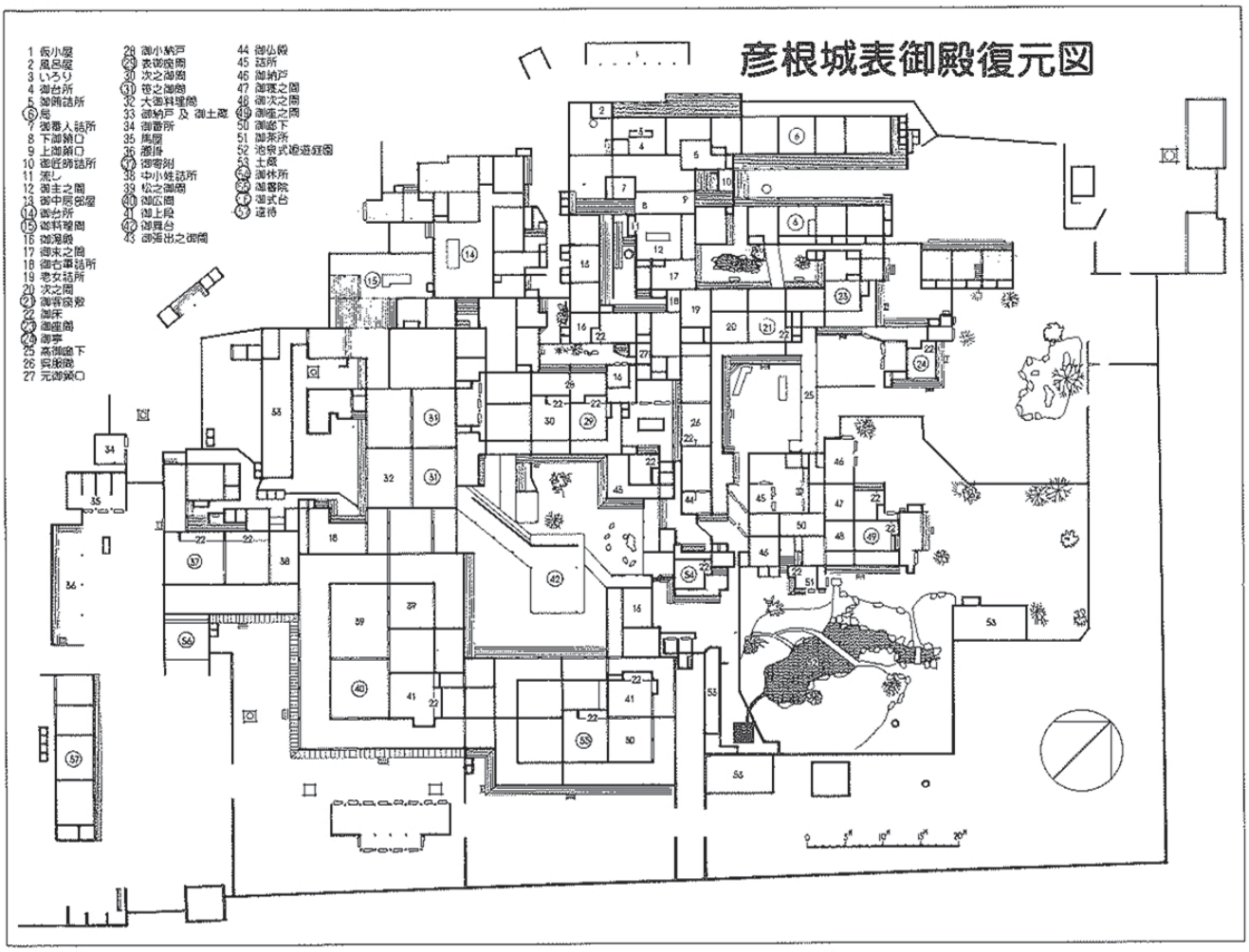
まず、表向からみていくことにしましょう。表門を入ると、ずぐ左側に遠侍が独立した棟を形成しています。遠侍は、「諸士勤番をなす」ところです。そして、表御殿の玄関口にあたる御式台に至ります。御式台より御寄附をぬけた東には、御広間・御書院と称した書院造りの大規模な建物が2棟、鉤の手に連なっています。床・明床・棚をもち、障壁画などで飾られた、対面・儀式などを行う建物です。両棟に挟まれた中庭には、新しく能舞台（御舞台）が建て加えられました。御書院と御広間を見所として、格式ある演能が幾度となく催されたことでしょう。

御寄附から西へ折れると、笹之御間に至ります。藩士が上番して藩の政務を司る所です。彦根藩士には5階層があり、その最も位の高い藩士は、通常「笹之御詰」と称されました。表御殿の笹之御間で政務につく家柄であるところからそのように呼ばれるようになったもので、禄高千石以上の藩士が詰めていたようです。その北には表御座間があります。藩主が公務時に座したところでしょう。笹之御間や表御座間の西一帯、つまり表向では最も奥まった箇所に御台所や御料理間が広がっています。表向各部屋の人々の食事を準備する所です。食事時のあわただしい光景が目に浮かぶようです。一方、能舞台の東方には御休所があり、間適軒という茶室が付設されています。公的な客人などの接待に利用されたのでしょう。

奥向は、庭園を望む御座之間棟や局棟などの建物からなっています。御座之間棟のメイ

1988. 2. 20

財団法人 滋賀県文化財保護協会



ンである御座之間は、藩主などがくつろぐ所です。この棟に面した庭園は比較的規模の大きな池泉式庭園で、回遊方式をとってはいますが、御座之間から眺めることに主眼を置いた庭園といえそうです。御座之間棟の一隅に、庭園を望んで天光室という茶室が設けられています。十三代藩主井伊直弼が著した『彦根水屋帳』にも登場する茶室で、直弼自身、藩士や城下の住職を招いて茶会を催しています。これら御座之間棟や庭園の地は、かつて御守殿という名の大きな書院造りの建物が独立した棟を形成していたところです。それが建て替えによって、庭をもつ奥座敷風の空間に変様しています。

御座之間棟から高御廊下を渡ると、御客座敷・御座間そして御亭の棟へとつづきます。御亭はくつろぐ要素の強い寄せ棟形式の建物で、二階建てであったようです。御客座敷棟から再び御廊下を渡ると、最も奥まった所に局の各部屋が棟をつらねています。盛期には4棟を数えることもあったようです。

表御殿跡の発掘調査

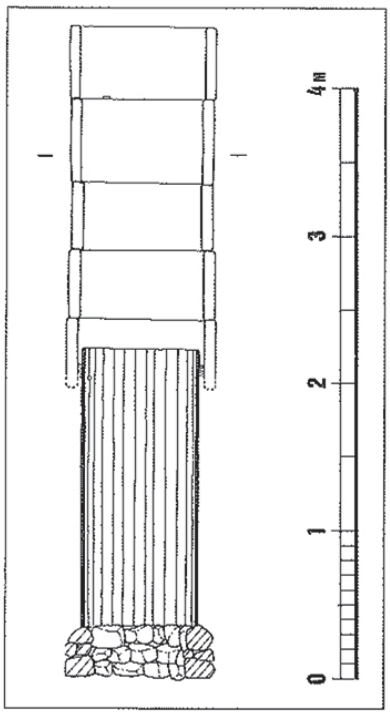
以上に略記した古絵図を参考にしながら、いよいよ発掘調査が始まりました。調査の進展にともなって、表御殿跡は残り具合が良好で、古絵図とも概ね合致していることが、徐々に明らかになっていきました。

各建物の床下にあたる箇所には、柱をささえる礎石が存在したはずです。ところが発掘調査では礎石がほとんど発見されませんでした。明治年間に表御殿が解体・整地された時、突出する礎石は抜かれて建材ともども市中に四散したのでしょう。ただ幸いなことに、礎石を据えた堀り方が整然と残っており、それが古絵図に描かれた建物の間取りとも良く合致したのです。このことによって、古絵図上の建物を実際の地に移すことが初めて可能となりました。

この他にも発掘調査の結果、貴重な発見が相次ぎました。ここではその中から、能舞台下の漆喰製共鳴装置、各種の井戸、そして庭園遺構について調査の成果を概観することにしましょう。

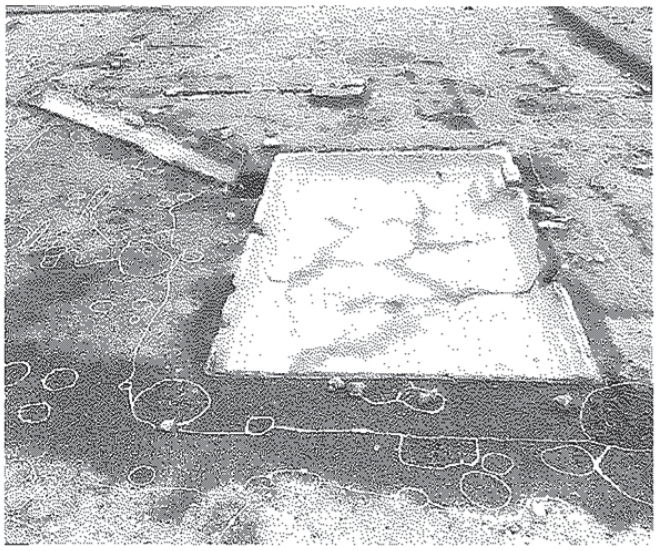
能舞台は、能を舞う舞台、その奥で笛や鼓を奏でる囃子方の並ぶ後座、舞台の向かって右側の張り出し部で地謡方が並ぶ脇座（地謡座）、後座に引き続いて左斜め奥へ向かう長い廊下の橋掛があり、その先は鏡の間を経て楽屋へと続きます。橋掛は単なる廊下ではなく舞台の延長であって、ここでもしばしば重要な舞が行われます。調査の結果、舞台と後座それに橋掛の下から写真のような漆喰製の大きな升が発見されました。舞台と後座の升は、縦 8.3m、横 5.7m、深さ 0.7mを計ります。橋掛のそれは、幅 1.8m 、長さ 9.8m、深さ 0.5mです。はたして何に使用されたのでしょう。演能時、演者が足で床をトンと打って拍子をとる重要な動作がありますが、その音響を高める役割が、実はこの漆喰升にあるようです。楽器などの共鳴箱の原理に似ています。能舞台の下に甕を埋める例は各地にありますが、舞台の下全体を堀り下げて漆喰で升をこしらえた例は、おそらく初めてでしょう。音響の方は、どうでしょうか。

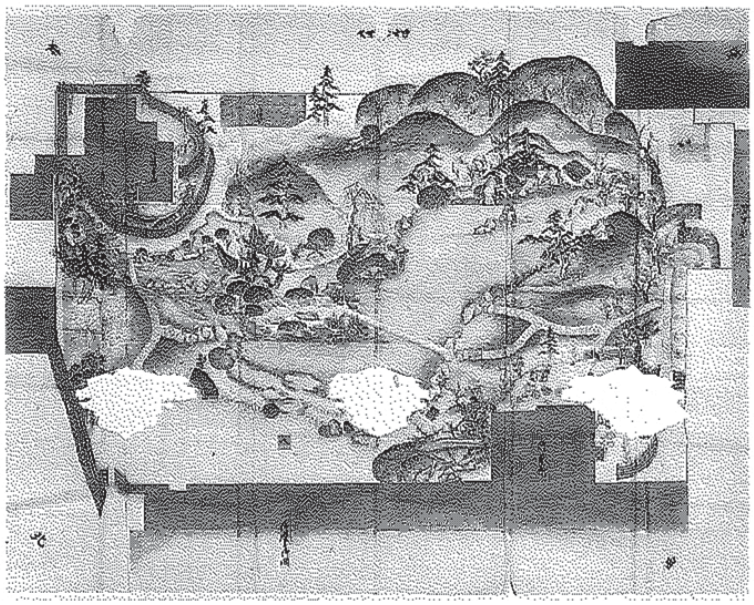
表御殿には合計１０基の井戸が要所に存在したようです。その中の２基は現在なお井戸として機能しており、５基について発掘調査を実施しました。図の井戸は局付近で検出したものです。まず湧水層に達する深さ 4.5 m余の深い穴を堀り、次いで湧水をさそうため３段に自然石を積んでいます。その上に縦板を円形に組んだ井戸側を据え、石をくりぬき円筒形に加工した材を順次５段積み重ねています。円筒形にくりぬかれた石には、細かい鑿の跡が無数に残っていました。高度な技術とたいへんな労力を要したことでしょう。その他、井戸には底のない結桶を伏せた状態で５段重ねたもの、円形縦板形の井戸側上に漆喰製の井筒を積んだもの、陣木の上に自然石と割石を乱石積みしたものなどがあり、バラエティーに富んでいます。



井戸断面図

庭園は、残り具合のたいへん良かった遺構の１つです。しかも、次ページの写真のように庭園を仔細に描いた古絵図が別に伝存していました。両者を合成しながら復元的に庭園をみていくことにしましょう。庭園の中央を占める池泉は、多様な景石によって護岸が縁取られ、一部乱杭や州浜が構成されています。池泉の手前側では天光室の横にしつらえた手洗鉢からの流れが池泉に入り、また飛び石を伝って礼拝石に立つこともできます。対岸では、築山を背景にして雪見燈籠が水面に姿を映し、大きな蘇鉄が影をつくっています。やや遠く巨石による石組みが滝口の流れを彷彿させます。池中には岩島が浮かび、両岸をつ


能舞台下の漆喰製升



庭園の古絵図

なぐ木製・石製の２つの橋が景色をつくっています。池泉に至る流れは、蛇行する長狭な遣水（やりみず）によります。遣水にはせせらぎ風の段が数ヶ所にあり、底は漆喰を貼（は）った上に玉石を敷きつめていました。表御殿の庭園は、このように一見過剰と思えるさまざまな庭の要素が随所に盛り込まれ、江戸時代後期の御殿庭園の典型をかたちづくっていたといえるでしょう。

表御殿の復元

古絵図や発掘調査の成果をもとに、いよいよ表御殿の復元が始まりました。今回の復元は、復元するための資料に最も恵まれていた江戸時代後期の姿によみがえらせることになりました。復元では、表向の耐火構造による外観復元、奥向の木造復元、能舞台の移築復元、庭園のように発掘調査で検出した遺構をもとに復元した遺構復元の各手法がとられました。

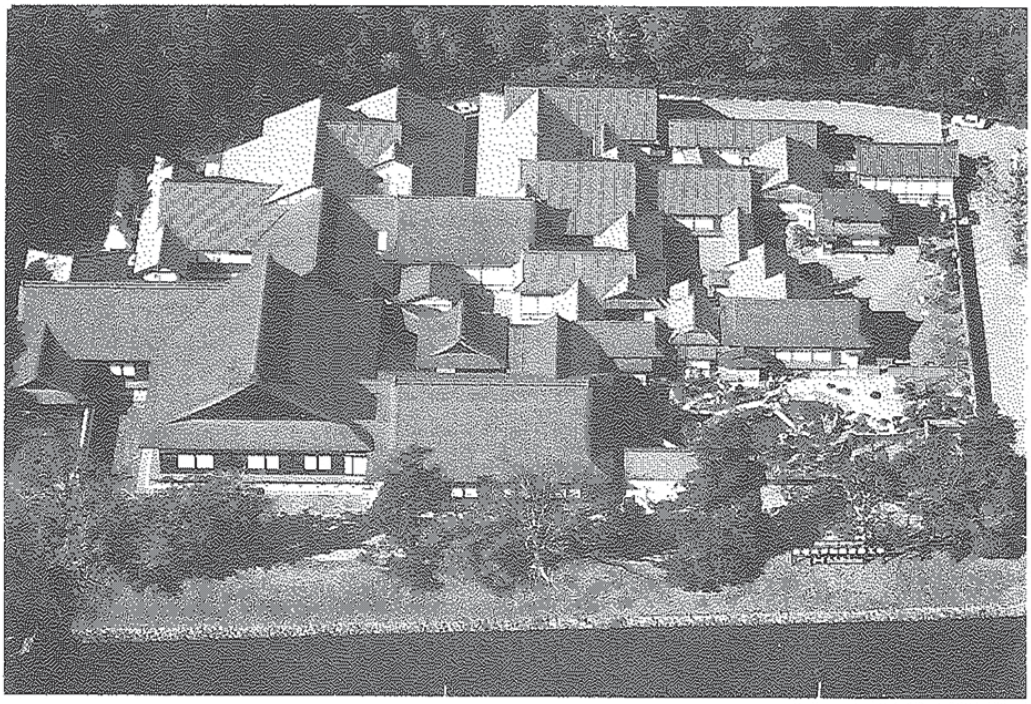
表向の外観復元では、外観のみ木造風に模し、内部は展示室や収蔵庫など博物館として最新の機能をもたせています。

奥向は、建物全体を当時の姿さながらに木造で復元しています。復元にあたり先述の古絵図や発掘調査の成果が活用された他、奥向各部屋の壁・障子・襖（ふすま）・柱・床そして天井にいたる細かい仕様を模型のように表現した「起（お）こし絵」が大いに役立ちました。

能舞台は、明治時代になって表御殿が解体された際、他に移築されて現存していた唯一の建物です。今回再びもとの位置に移築復元することになりました。発掘調査で検出した漆喰升も床下に正確に復元されています。庭園の復元では、発掘調査の成果が最大限に生かされました。

このようなさまざまな復元手法が一体となり、博物館の建物そのものが江戸時代の御殿建築の再現という意義を担っています。

（谷口　徹氏　提供）



復元された表御殿